

明武 9
番 145
卷 22



護痘錦囊續編上

須知目次

- 第一 痘の轉機
- 第二 痘の八證
- 第三 痘の順險逆三證
- 第四 痘熱と他病の熱の辨
- 第五 正痘水痘の辨
- 第六 痘瘡麻疹の辨
- 第七 肌膚の善惡
- 第八 見点部位の前後
- 第九 痘の形色
- 第十 唇舌の善惡



護痘錦囊 續上

目次

一

此痘家須知十條六條め心仍おこさ事して急務也あらば
痘瘡病人さかかり急入用の所ハ正編の書見出と記せり
是急務肝要の所なり痘の日限のたとびよきふひようん
引あてきたるぬべ見ご左のて

護痘錦囊正編

初熱のつる時容體に引あて見出とてころぬべ

でころひ 痘みえてころ三日の間は見出とてころぬべ

みころみ 水うみ三日の間は見出とてころぬべ

かせ 本うみ三日の間は見出とてころぬべ

かせ かせ三日の間は見出とてころぬべ

右ハ痘のたとびの順あて尋るに便ならぬ又驚引つけ或ハ
齒ぎまりふる等の諸證と分類してころぬべとてころぬべ
續編へいす

第一痘の轉機

○初熱

或ハ毒を毒或ハ毒を毒或ハ毒を毒

是痘の熱の初つる時ハ 初熱 見點 起脹

灌膿 收靨 落痂 各三日ツとて病の輕重ニ

よつて延縮ありとて初熱ハ日數定らず其故ハ

風寒諸氣ハ犯さると又ハ調護ありとて其由也

見點延あり又元來元氣よく痘毒盛よりして

元氣ハ押あがり一日ハ半日してころぬべ是等ハ

元重ハ菜めて漸三日のたとびよころぬべ又至て

かろうして一日半日で見あるあり身赤黄及むす

○見點

痘瘡十三日のときび見点の初の日よりかぞへて
初熱六七日ありても日取の内へ入らざる

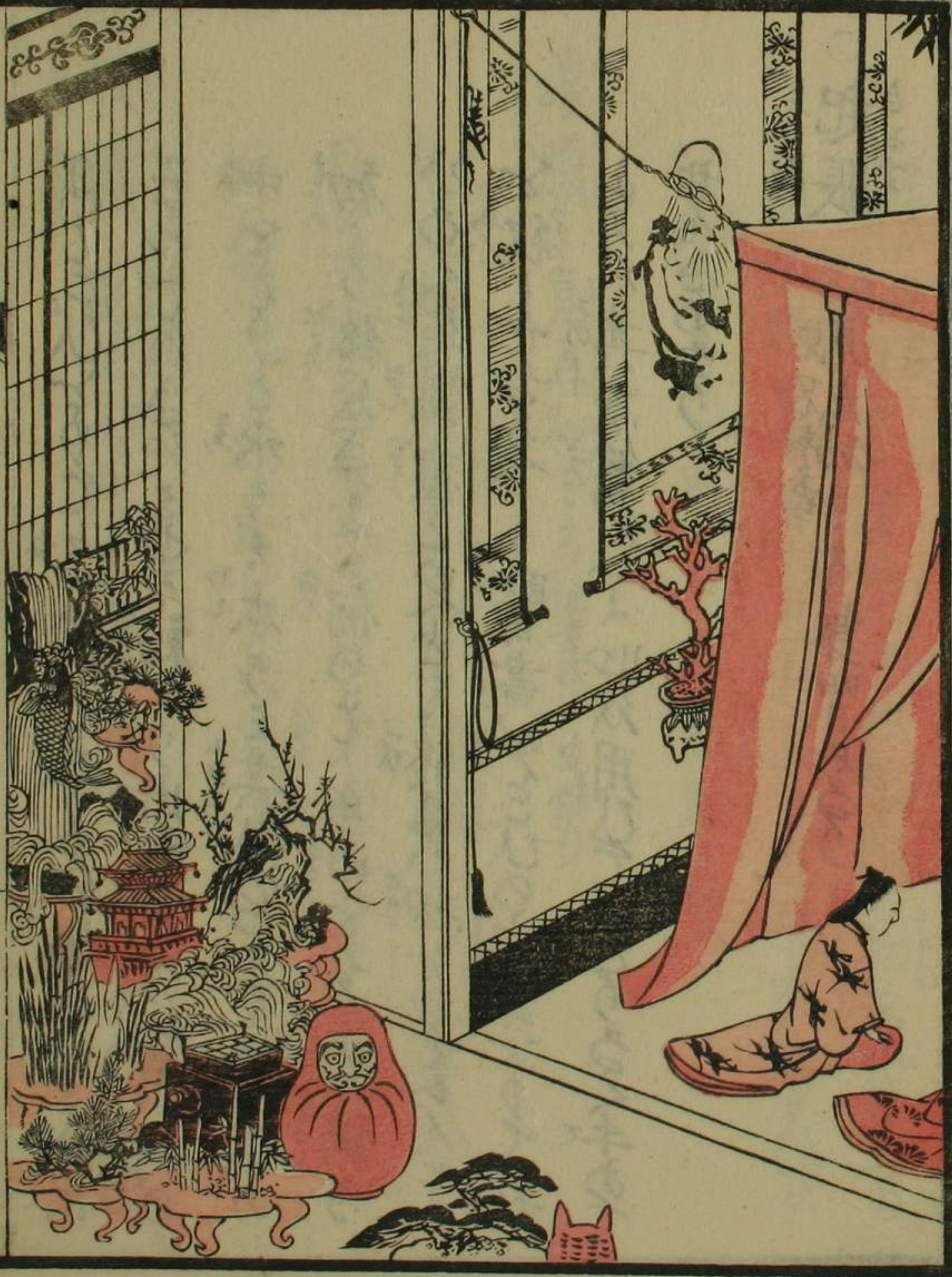
痘の初てある日と見點のときめ次と見點の中
三日目と終といひ又でそのひのままひと云は三日目と
医書六出齊といふ按むるは一身のうちをいふも
初て痘の一粒あると一点血とあらざるものとて是と
見點の初とすといふも是は見附得がた也
いふんとあはれいづれ先一点血とあらざるも
とて裸體よりしてまのりて居るもあらざる

一粒の初見つけ得がた也痘のたがて
いづる場所かた口のまわり或は額とち或は手
或は足とち場所の前後はけがた也
あらずとて一点血の證はあらずとて場
所の前後はあらかせよすべからば
一点血とあらざるを見点とて出さるるを
齋山とよくあはれと起脹十分水と持と蒸
脹本膿よかると灌膿十分膿とのつと漿
満かせんと欲して壓面のごとく本らるるを
むと収壓かきここの出来ると結痂と其次穿く

美豆吊
續上

痘中調護

四



言看金囊

旨不至齋藏



よととびとめて各とつくまうるに倍ぬいまで出
 そろとぬさたもる初より出そろひの初出揃の
 中ととりと水うそ本うそ其外いづも轉機の
 初より終かさて何のたため中ととりと稱る
 いかく追難痘といども終ぬ功と夜たらんこと
 と祝してるるべし醫書にたとびの次第といふ稱
 まるゝ其次築くよ心公用以てのころるて手あて
 せんといふる

○起脹
きちやう

見点初日より算四日めり

見点初日より算四日目と起脹の初といふ算五日
 目と起脹の中算六日目と起脹の終又いふ算ひと
 いふ此六日目と医書に六蒸脹といふ

○灌膿
かんぬ

見点初日より算七日めり

見点初日より算七日目と灌膿の初といふ算八日
 目と灌膿の中算九日目と灌膿の終又いふ算ひと
 いふ此算九日めと医書に六漿満といふ

○收靨
かせ

見点初日より算十日めり

見点初日より第十日めと收壓面の初第十一日めと
收壓面の中十二日めと收壓面の終又ハをさひといふ此
十二日目と医書ハ結痂といふ

按どるゝ壓ハ膿のせんとて膿のま中多クハの
ごくくをむるゝ壓字多クハの時ハ於股反めて
音エフるゝ人の姓のよハ余丹反音エフるゝ今
多クハのさるゝ音エフるゝべゝとるゝハ医家多ハ
シウエンととるゝハエフのエンハ轉せゝるゝ今
まどゝエン音と用ひ来る夏久ハハまどゝととるゝと
とてとらるゝエン音ハととるゝ

右の見点起脹灌膿收壓と痘の四節といふ
此四節十二日ハ痘業成就の肝要の日といふ
一日酒湯の賀とつてよたハ似たり

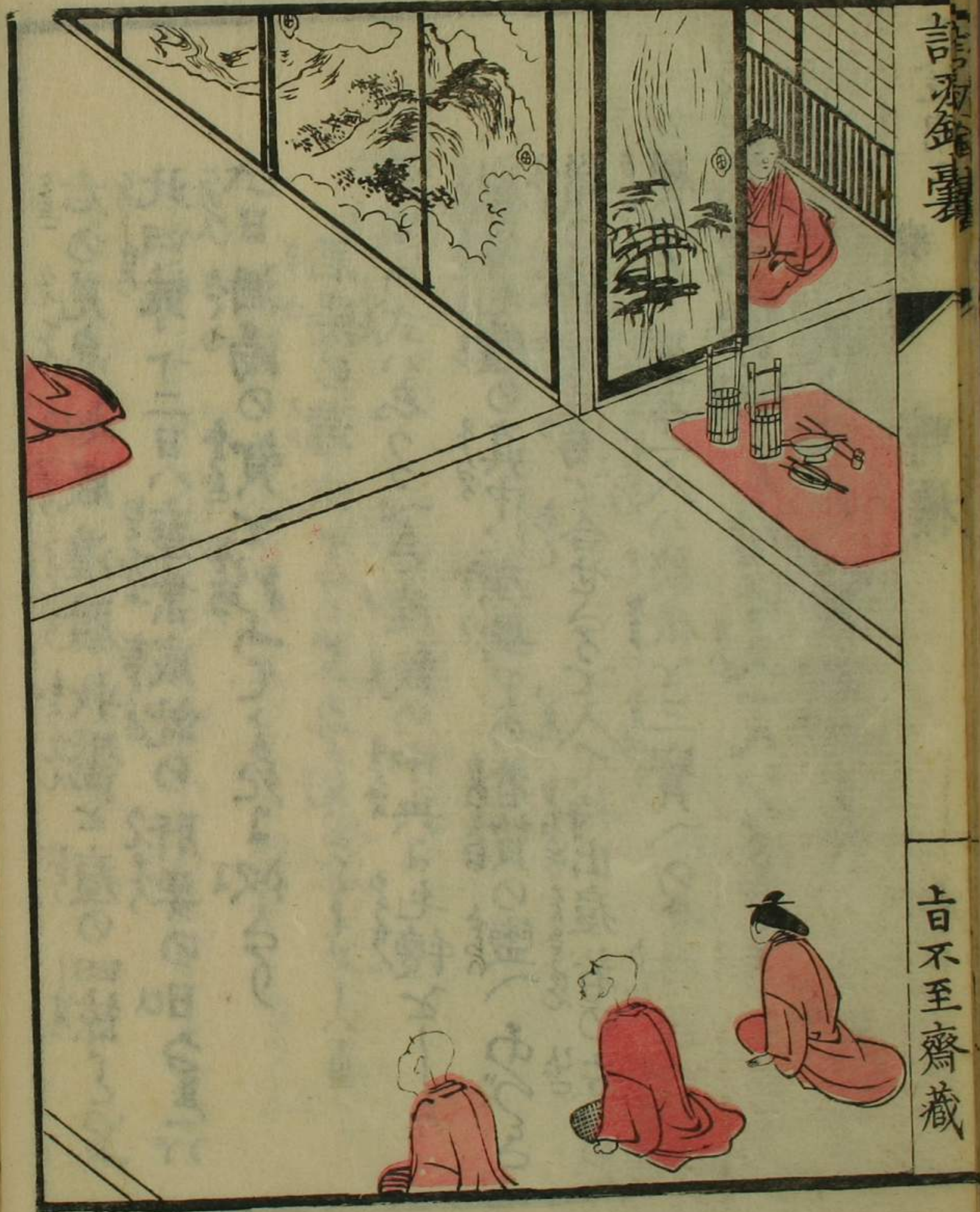
酒湯の式ハ志るゝ座敷の中央ハ毛氈と一
痘者毛氈の真中に座掛の者質の鹽へあづと
鼠の糞酒と湯と合せゝるゝとて持出痘者の左リ
後の方へ置今一人ハ狹俵と三寶へのせ持りて痘者
の右の後の方よりかごす又一人ハくぬぎととるゝ
のひうの後の方より鹽の酒湯とあめとよく水と



續上

轉機

七



言為金囊

言不至齋藏

灌^{そそぐ}か^らる^も生^な糸^{いと}とする^{こと}と三^{さん}度^どよ^うく^て終^はる^まら^り
 七^{しち}と^とろ^ろ者^{もの}診^{しん}ひ^まま^りて本^{もと}の寢^{しん}所^{じょ}よ^り入^いり^て平^{へい}服^{ふく}よ^う
 たり^たり^た此^{この}時^{とき}諸^{しよ}人^{にん}質^{しつ}を^あら^わせ^る今^{いま}も^もく^くその^{その}圖^ずを^あら^わせ^る
 最^{さい}省^{せい}畧^{りやく}ハ^ハの^のく^く心^{こころ}ま^まる^るせ^せま^まべ^べ但^たさ^さく^く也^やの^の洞^{どう}
 交^{かう}ハ^ハ續^{じよく}編^{へん}下^げ三^{さん}十^{じゆ}四^{じゆ}丁^{てい}下^げ也^や

○落^{らく}痲^ま

見^{けん}点^{てん}初^{しよ}日^{にち}より第^{だい}十^{じゆ}三^{さん}日^{にち}め^めり

見^{けん}点^{てん}初^{しよ}日^{にち}より第^{だい}十^{じゆ}三^{さん}日^{にち}め^めと落^{らく}痲^まと^らふ^ふこ^こら^りて
 餘^よ症^{しやう}は^はけ^けま^まら^ら瘡^{そう}全^{ぜん}快^{かい}なり但^たし^し重^{じゆう}症^{しやう}ハ^ハと^とび
 大^{だい}よ^よか^から^らべ^べ十二^{じふに}日^{にち}の^のせ^せの^のか^から^らる^るべ^べら^らず

第二^{だいじ}痘^{とう}の^の八^{はち}證^{しやう}

- 大^{だい}熱^{ねつ}汗^{あせ}多^たき
- 皮^ひ毛^{もう}焦^{あせ}枯^か
- の^のど^ど喘^{ぜん}
- 氣^き粗^{あらく}
- 兩^{りやう}眼^{がん}浮^う腫^{しゆ}
- 肌^きの^のこ^こ
- 風^{ふう}寒^{かん}の^の邪^{じゃ}と^とう^うの^のり^り
- 身^みよ^よ大^{だい}熱^{ねつ}多^たき
- 肌^き層^{そう}柔^{じゆう}嫩^{にん}
- ち^ちと^とく^く汗^{あせ}の^のり^り
- 裏^{うら}實^{じつ}
- の^のど^どか^から^らた^た水^{みづ}と^と好^{この}ま^ま
- 大^{だい}便^{べん}秘^ひ小^{せう}便^{べん}法^{ぽう}
- 飲^{いん}食^{しょく}易^{いやく}消^{しょう}
- 或^{ある}ハ^ハ腹^{はら}を^をり^りて食^{しょく}が^が好^{この}ま^まぬ
- 裏^{うら}虚^{きよ}
- 食^{しょく}を^をま^まず^ず
- み^みた^たた^たて^て頻^{ひん}々^{ぜん}
- 小^{せう}便^{べん}清^{せい}
- 大^{だい}便^{べん}多^たり
- と^とく^くた^たよ^よら^らず

古^こハ^ハ是^{この}痘^{とう}の^の四^し症^{しやう}と^とい^いふ

○毒壅

○根点稠密
○痘色こまみず

痘形不尖髮
痘皮の下よがまてゆぬ

○氣虚

○痘白く山のびず
○えき勢ゆるく

痘の形むらむら

○血熱

○見点色深紅漸入焦紫
○斑ぐらぐらとせぢぢる

○血虚

○痘色淡根散
○痘の色と地のまじり同くみぢて分る

痘科鍵此四症と前の四症を合して痘の八證とす

第三 順險逆三症

○順證

順證とは訓て痘は無理横らぬるまじり
るる症あり痘の多やよかえらるる痘かろうして
逆症もあり痘重うして順症もあり順症は業と
用らるるやむらむら必竟痘は癒治る加ふるあ
る症と順症とあり痘瘡と成就仕はんまじり
他病は業々服して病と除き退んとせらるる

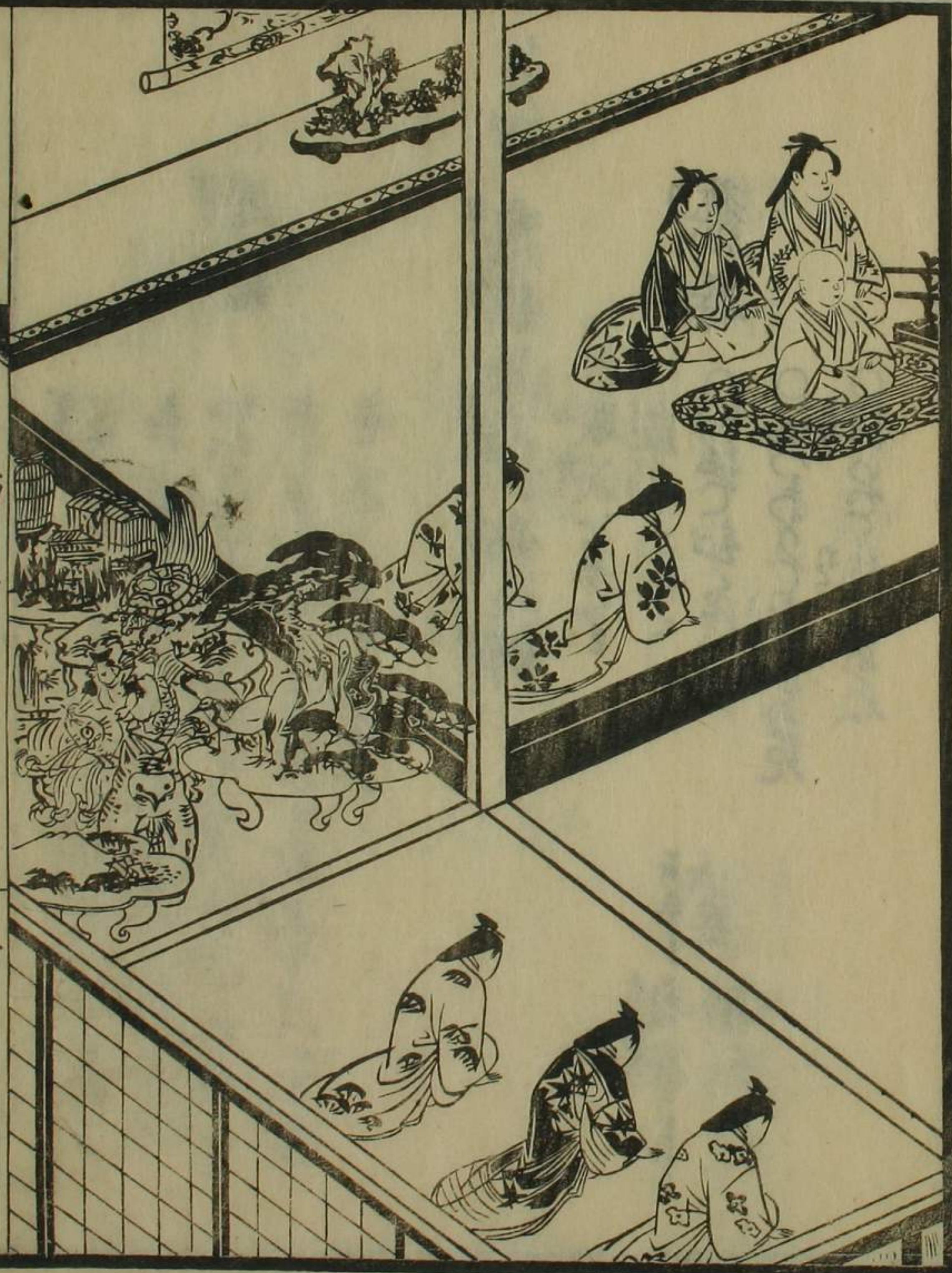
○險證

險證とは訓て山の險阻のまじり險阻の地
案内者つひは行とあてまじりるる痘も險
症は業の奏切るるは痘が成就するることあり
とせらるるて瘡治とすよむらむら

美衣帛
續上

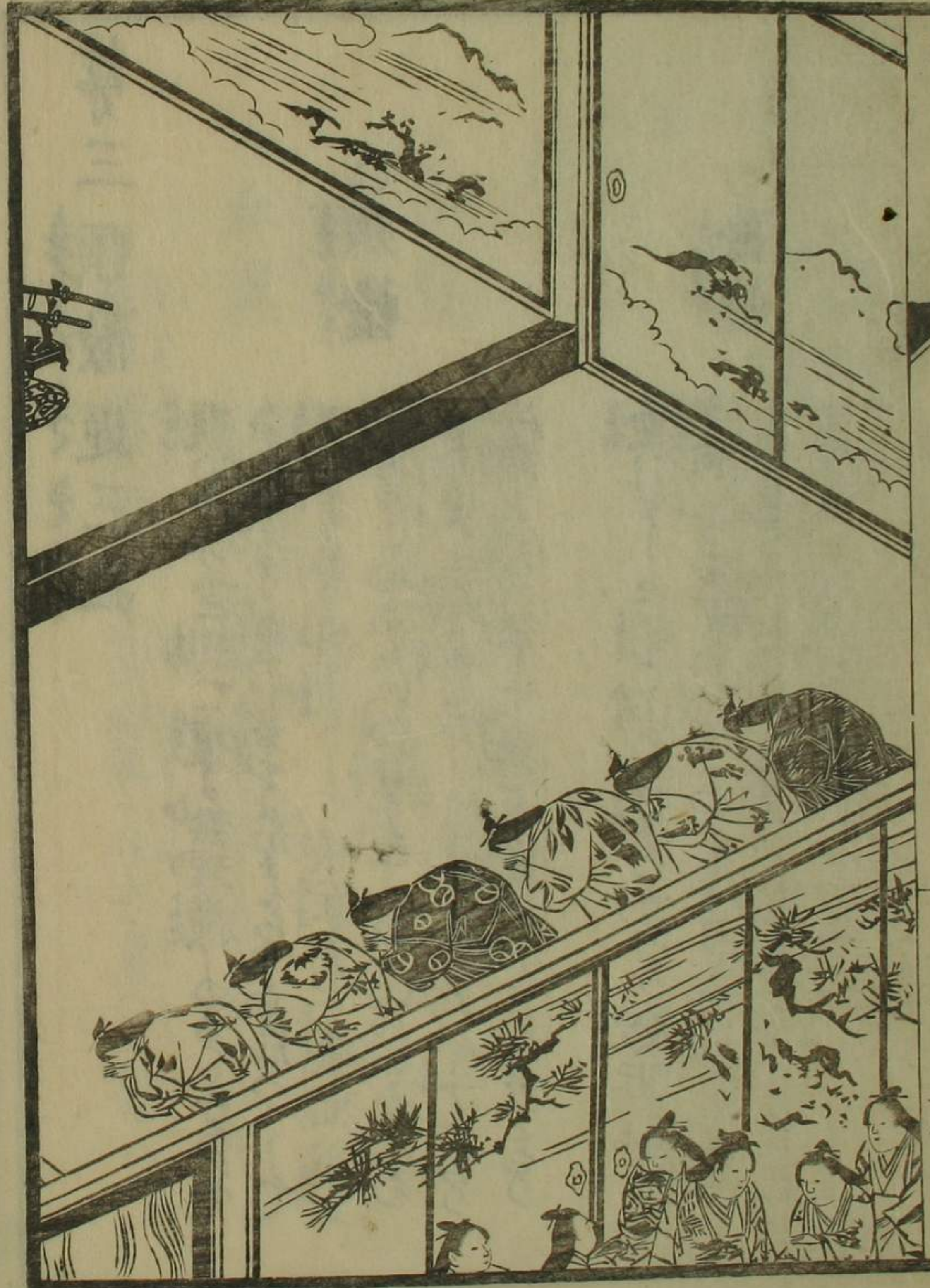
酒湯の賀

十



言者金

旨不至齋藏



○逆證

逆證さうしぬと訓くその症無理さうあるよ
きて療治すもどかぬ症ありきく悉くよらべ
からびて正治せざるも療治せむて坐して
たわらんと見らるゝ志のびんや又十が一二日並
まてあゝもあはるる

第四

痘熱他病の熱の辨

- 眼淚とあま
- 鼻息あらく
- のぼてむく汗さ
- 後ありて寒と氣死
- 汗と熱さあぬ

痘熱あり
傷寒あり

熱の時

- 寒氣
- 汗のせど
- 汗つら
- えりと脊とあま

傷寒あり
痘熱あり

但

- 痘瘡ハ 毒内より出
- 傷寒ハ 邪外より入

○痘瘡ハ 五臓の症具る

○雜病ハ 僅よ一二臓の症とあらはる

五臓の症

心
○かほわろ紅き
○びくくむくつく

肺

○声あひ死
○水たまゆる
○甘死
○くさぬ

肝
○眼あろく又あざる

脾

○あくび
○わごえろ
○吐から多死
○肚くさる

腎
○耳の後紅きまぢゆる
○耳ひゆる
○腎肉ひゆる

痘瘡は右五臓の症多具る
他症は二一症とあらす
あつととつよなつむびづらび

第五痘瘡水痘の辨

痘瘡ハ 面部より紅腫ゆる
但熱多し風寒を受る所とさひど先面部につく

水痘ハ 手足の面部より
但熱少し風寒を受る所とさひ手足は出

正痘 水うその後に出のいんをわちのくむ具る痘眼と
よこに膿下るる基なり

但 痘眼有ハ 正痘 痘眼無ハ 水痘
又極虚症は痘の皮を針の孔のぞく
あつととつよなつむびづらび

水痘
○根のまへつら
○色あらく赤からび
○膿よらすよて痘眼なり

第六 痘瘡麻疹の辨

痘瘡麻疹の熱
わづかにとゞく

麻疹

- かみせまらうあま
- 胞とまらういり
- 咳きあので
- のんがら
- 熱あつたまらう

見点

痘瘡ハ ○根肉中より有て極めてふら
麻疹ハ ○皮の内よりかんで肉中より根を

○痘ハ

○頭面

ゆきこ
多きこ

○疹ハ

○見点

大少をさうひちて追々
粒をさうてこまらうとよう

第七 肌膚の善悪

肌膚

- 明潤光彩
- 乾枯昏滯

凶吉

○地の色白くかた

指とあひこるあ一本の紅

吉

指を頬か
あてまらう

地のろそのまらう指の透る

凶

指とあひまらうまらう

生色ハ
死色ハ

春の花の露と含うて
秋の草の霜と経るが

凶吉

第八 見点部位

面部

○眉以上
○眉以下

後よこえ 善
先よこえ 善
後よこえ 悪
先よこえ 悪

一身

○面部
○手足

後よこえ 善
先よこえ 善
後よこえ 悪
先よこえ 悪

見点部位配當及面部六十位等ハ細クに論ぜらる相家占考の要ニテ治療ノ無益アリテ面部ハ口唇の辺より次第に額ニ至ルルニ至リ吉ト額より下ニ至ルルニ至リ凶ト面部より手足を先ヨシ吉ト手足より面部ニ至ルルニ至リ凶ト手足の末後より陽氣の分る頭面ト先中面部ハ口唇の肉多キ所先中額の骨多ク肉薄キ所先後中見点は六十人ノ吉者ハ女道理ニカクテ彼の配當の微旨の如キハ予不才ノ一モ知レザルガテ因テ配當の説姑ク是ト云ク

第九 痘の形色

形

○丸くうつろく
○とんがり高く
○かろくうつろく

善

○かてくうつろく
○かてくうつろく
○かてくうつろく
○かてくうつろく

悪

形

○かてくうつろく
○かてくうつろく
○かてくうつろく
○かてくうつろく
○かてくうつろく
○かてくうつろく
○かてくうつろく

最大凶

色

- 鮮あざよりあざなり
- あざのあざなり
- あざのあざなり
- あざのあざなり

善

- あざのあざなり
- あざのあざなり
- あざのあざなり
- あざのあざなり

悪

痘

本紅絹のあざなり
 蕪木漆のあざなり

あ

第十

唇舌

唇舌 ○あざのあざなり
 ○あざのあざなり

吉

- 白あざ
- 赤あざ
- 紫あざ
- 黒あざ

悪

- あざのあざなり
- あざのあざなり
- あざのあざなり
- あざのあざなり

凶

護痘錦囊續編上終

護痘錦囊續編下

目次

熱

驚悸

嘔吐

寒戰咬牙

痛

腰痛

喘促

發毒

聲啞

惡寒

狂

泄瀉

腹痛

喉痛

疥

水瘡

肉腫

さむけ

くさくさあざなり

せきあざなり

かみみ

なまあざなり

のあざなり

むせぶ

肉のあざなり

倒置

膿とゆわかれし内へ引こむる

黒瘡

焦紫

皮薄漿瀉

空倉

膿の全うたまり

爛

臭爛

毒皮膚に滯るる

膿水

うきみづ

害 疔

まてよかせて疔又害を

失血

血と九竅より出る

斑

まじり

水泡

けしつあまらふのよく数粒
水とあんでひびくはひびく

欬嗽

せせ

丹疹

あつさゆせりのこ

眼

め

蟬痘

又とまうとまうのうちけし虫と生ぶ

口瘡

又走馬牙疳

禁忌

しみの

藥方

目次終

護痘錦囊續編卷之下

江戸 石塚汶上尹著

證議類聚

熱

初熱

初熱須知と見

正編の初

見点の

見点三日のうちで解毒せ

外麻葛根湯

十神解毒湯

毒甚則涼膈散

清毒活血湯

或 涼血攻毒飲

或 清涼攻毒飲

○まてよかせ

○まてよかせ

常候とすあつさゆせりの

○まてよかせ

常候とすあつさゆせりの

護痘錦囊

續下

熱 惡寒

一

升麻葛根湯加生

補中益氣湯

升麻葛根湯加生

温中益氣湯

異功散

聶氏建中湯

寒 聶氏建中湯

熱 大連翹飲

加大黃

惡寒

さむけ

又さむけをいふは寒のさむけなり

○惡寒

外邪をさむけ

誤散すべし

但全麻寒中してさむけするは尤温補すべし

又熱毒ありて惡寒するあり

○大抵前より同じ見点の部と見え

○惡寒

○惡寒

○惡寒

内攻すべし

但寒戦と大抵同

寒症ありて寒より熱熱の症ありてさむけするは尤温補すべし

驚悸

おどろきびくつき

驚馬は四種あり

○毒瘧とてどき甚しうして驚馬をうつすあり

○氣血をこくして驚馬をうつすあり

○平生肝のやまひありて驚馬をうつすあり

○瘧とてさびかたに驚馬をうつすあり

○瘧

瘧のつらみ

氣血虚弱ゆへ

○出

出をうつす

熱毒内よりうつす

○瘧

瘧のつらみ

驚を治すべし

是元來驚瘧ありて此の瘧の熱はよるとして驚をうつす

毒瘧 清解散

怯弱 温中益氣湯

肝氣 疏肝透毒散

瘧未明 導赤散

發散

便秘者 下之

瘧順者

濟世鎮驚散

加全蝎 姜蚕 天麻

即南極 寿星 湯

去白附者

南星 防風 蠲退

薄荷 甘草

續下

驚

二

伏熱 蕪解散
火毒 涼膈散

直指方抑肝散
合保元之類
抑肝散
當歸 白朮 茯苓
釣藤鈎 川芎
柴胡 甘草

內毒盛外為風寒
所束驚搐者
蕪解散

毒壅不能發于外
而驚搐者
清解散

氣血怯弱不能送
毒於外而驚搐者
温中益氣湯

○痘色よりぬい 毒内よりなりて重

○伏しき後あまひ 疹のさうきんす

○火どくあまひ 火毒と解すべし

○本^えの時^{とき} 脾の臓弱し肝の臓と制するにあてたまふ

脾と肺との二臓とつとも補ふべし驚

○痘不成して驚發 凶

○かすて後發す 死不治

○ふ^ちのあ^まと紅^{こう}して驚^{きん}發^{はつ}す 非^{たう}散^{さん}すべし

是^{これ}外^{がわ}風寒^{ふうかん}とさうけ^{うけ}内^{うち}餘^{あま}毒^{どく}と相^{あひ}う^あり

○驚^{きん}一^{いつ}たび發^{はつ}して死^しするあり 毒^{どく}内^{うち}よりつ^つ外^{がわ}

是^{これ}初^{はつ}熱^{ねつ}のときらうと或^{ある}は狂^{きやう}のときま^ま死^し

て母^{はは}ま^まらぬ^{らぬ}は^はの^の子^こま^ませ^せん^んせ^せん^んて^て熱^{ねつ}う^うち^ちま^まと^とり^り外^{がわ}惡^{あく}氣^きの^のあ^あり^り内^{うち}外^{がわ}相^{あひ}應^{おう}して^{して}志^しわ^わら^らし^しむ^むら^らり

か^かね^ねて^てま^まら^らま^ます^すま^まが^が 愈^よべ^べし

狂^{きやう} 脾^ひ胃^いの^の屬^{ぞく}也^{なり}

○初^{はつ}熱^{ねつ}の^のう^うち

見^みえ^えぬ^ぬま^まへ^へ

順

美豆用 續下

狂嘔吐

三

陽明散爵
升麻葛根湯

十神解毒湯
加大黃
甚 涼膈散

托裏清熱
人參 黃連 升麻

涼膈散

嘔吐無他症
二陳湯
小半夏加茯苓湯
升麻葛根湯

○見えて中^ひぬ
後門^ひぞく脾胃^ひの伏す

ひの熱と
よろきんすべ

○出^でて
痘^う美^うして
止^やまぬ

熱とさる^ひ胃^ひ中^ひと
す^ひすべ

○本^かう^かの際^あ際^あ

火毒^{かどく}解^かず 重^{おも}火毒^{かどく}とさます

○か^かせ^せ後^ご 毒^{どく}外^{がい}よ^よの^のま^まず

多^{おほ}ハ凶^{あや}

○嘔^{おう}吐^とを^をら^らか^から^ら多^{おほ}く^く死^しら^らり

○初^{はつ}熱^{ねつ}の^のうち

ぞ^お内^{うち}伏^ふして出^でず

但^{ただ}痘^うと^とさ^さす^すべ^べを^をら^らか^から^ら多^{おほ}く^く死^しら^らり
を^をら^らか^から^ら多^{おほ}く^く死^しら^らり

脾^ひ虚^{きょ}

参^{じん}砂^さ和^わ胃^い散

清^{せい}熱^{ねつ}解^か毒^{どく}

清^{せい}表^{ひょう}散^{さん}毒^{どく}湯

補^ほ胃^い

平^{へい}胃^い散

六^{りく}君^{くん}子^し 之^の類^{るい}

風^{ふう}寒^{かん}及^お食^{じき}傷^{やう}

升^{しょう}消^{しょう}平^{へい}胃^い散

○で^でと^とろ^ろふ^ふて^て中^{ちゆう}ま^まぬ

○胃^いの^の氣^き虚^{きょ}す^すま^まぬ

脾胃^いと^との^のう

○秘^ひの^のど^どが^がい^いれ^れが

秘^ひつ^つと^とさ^さま^まず

○寒^{かん}薬^{やく}と^と用^{よう}す^すま^まぬ

胃^いの^の氣^きと^と補^ほふ

○傷^{やう}寒^{かん}ふ^ふて^てま^まぬ

お^おろ^ろい

○食^{じき}傷^{やう}ふ^ふて^てま^まぬ

お^おろ^ろい

○泄^せ瀉^{りや}を^をら^らか^から^ら多^{おほ}く^く死^しら^らり

脾^ひは^は属^{ぞく}す

秘^ひ脾^ひは^は壅^{おう}して上^{じやう}へ^へ蒸^{じやう}する^{する}こと^{こと}あ^ある^るま^まず

志^しの^の秘^ひつ^つ下^げへ^への^のろ^ろり^りま^まず^ず初^{はつ}よ^よく^くなる

い^いす^する^るま^まず^ず淫^{いん}と^とく^く下^げへ^へ解^かす^する^るゆ^ゆは^は是^しと^と分^{ぶん}消^{しょう}の^のま^まと^とそ^そよ^よい^います

升麻葛根湯

四苓散

五苓散

理中湯

木芍調脾散

白朮白扁茯苓

砂入薄荷厚朴

大棗 棗或加參

保元湯理中湯

合方

異功散建中湯

尿黃臭穢尿赤澀

痘紅紫

加味四苓散

尿青白骨利

痘淡白 虛寒

參朮散

虛滑不止

七味葶苈丸

脾胃清熱

惺々散

調胃氣湯

涼膈散

保元湯或加附

木香散

異功散

○初熱 見えぬまゝ 毒下解を吉 但ちうきんすべし 止むべからず

○でそろうめてせまぬ 内へちちのらんとせむる 急よ止むべからず せむべからず

○本丸 山もひひす 根の血ちらぬ 必死す 食傷 食を消し みるひくべし

○山もひひす 根の血ちらぬ 必死す 食傷 食を消し みるひくべし

○山もひひす 根の血ちらぬ 必死す 食傷 食を消し みるひくべし

○痘はかきとらす 吐酸く臭もとるべし 食傷 食を消し みるひくべし

寒戦咬牙 寒戦 咬牙

○初熱 熱いころ 毒脾胃は伏す ちうきんすべし

○でそろうめてせまぬ 寒戦咬牙す 脾胃の熱を解す 脾胃の大熱たるはかへて寒症に似たり 寒よよるとるすべからず

○本丸 そのと死 虚寒 大よ温補すべし

○膿とりのぬ 脾胃虚 凶

○かせご 右同 凶

寒戦交牙

寒戦交牙

五

○七日以前熱は属す

寒戦 心の臓の火の旺盛
上肺の臓を薫すべし
肌の中の毛の尻をすべし
氣のれざるなり

○交牙 脾胃の肌肉をす
其経絡上下の齒をすべし
脾胃の後の此ところをせば

○七日以後

寒戦 陰血凝て
陽分虚す
氣虚
大は參朮を用
掛枝木香を主
す陽分を温む

○咬牙 陽氣陷て
陰分虚す
陽氣血道に入る
血虚
大は參朮を用
掛枝木香を加
陰分を實す

癍 かみみ 虚 又実を属するなり

○痘灰白ある 氣虚 内を補痘をすべし

○痘毒さるんむて 火熱いままぬ 火熱をすまじ

○うきとく 補ふれ かもみ出る 少く清涼を用

○膿うすく 毒化せざるなり 虚

○山ひけ 痒甚なり 死

○痒どころ かきやうりて膿血う死 死

温中益氣湯
千金内托散
多飯鹿茸湯
十神解毒湯
黄連解毒湯
涼膈散
多麥清補湯

内托類
木香散
異功散

續下

痒痛

六

活幼平和湯

錢氏白朮散

加防風白芷

不可太過損灌

膿之機

保元湯加山查木香

膿色已滿痛楚則

四苓散利之

○痘の内虫に死てかゆき 虫を取去ハ 此痘死せず

○邪氣又ハ穢氣けがれより出ル 毒を犯らるる

○きづらみのとき 氣不足してあつたぬ

○痘美ありてかゆきのころ

○微痒 常候そ有べきころ

痛 かゆきハ 止めて善

○痘 なるころ

○地 痘と毒はよい

○痛 痛を十分とちてハ 小水を通すべ

○微痛 常候そ有べき容

腹痛 毒脾に對す

○初熱 痘とならざるべ

○火毒 大毒を解すべ

○大便秘 ゆるすべ

○大熱退 腰痛かすぬ 凶

○痘色 かきねてよろまします

○痘色 毒脾胃にあらはれしを

○風寒 あつて

○食傷 よまる

○元来虫積 ある

升麻葛根湯

火毒

清熱解毒湯

便秘

調胃承氣湯

大熱

涼膈散

升麻葛根湯

風寒 應服升麻

食傷 平胃散

或用大黃

虫積 椒梅丸

腰痛

瘵のむねをんがたつ後下へてり落ちて腎の臓とあつすゆゑなりまゝ火熱のたつおりのまゝなりて腎水かまつきたるなり

初熱

急な氣を引きたる

痘色頃

○痘色頃やくて内症なり
○痘色頃やくて大熱ならぬ

腰痛とあつたら
老の氣とあつたら
多凶痘下陷なり

喉痛

のんどごのど

初熱

肌膚ひらひらるゆゑ
肺氣表へまづりて
飛道よやくらむらう

ちうきんすべ

升麻葛根湯

痘色頃

仲景当飯四逆
加呉茱防風蒼朮

咽喉痛通藥

消毒飲

甘吉湯

加牛房子

咽喉痛甚

甘吉湯加牛

升麻葛根湯
蘇子降氣湯

前胡代葛根
十神湯加石膏
或麥門天花粉

多麥清補湯

本

のいどの内の中も痘あま外の瘵とあつたらしく
せうゆゑいせむべいかせよあちのづららるる
ア

喘促

のいどせりくせりつく

初熱

風寒の邪は表とせられ
毒氣のまじりたるゆゑなり

ちうきんすべ

痘色頃

たん火盛なり

痰火と消すべ

初熱

脾虚に屬す

内を補ひ元氣をたすの
たんとあつむ

痘色あ

毒内よせむ

悪候

うみと

喘促疥

八

續下

注瘰癧

かせ後の瘰癧中に
落ると痛愚から
す

是は瘰癧に化毒
まで肌肉に傳住
す極て重

治法毒こそら解
毒を加へ外ハ象牙
膏を以て是と貼す

四聖膏

珍珠 碗豆 俱焼
乱髪 三灰 冰片 羊分

用油胭脂調成膏

疔

その形は毒は伏しりゆる瘡疔の疔は指針といふ
かて毒肉の中へ毒を打つて打つて打つて打つて打つて
入るると毒は肉の中へ入るると毒は肉の中へ入るると
かみみみみみみみみみみみみみみみみみみみみみ
て肉の中へ深く入るると毒は肉の中へ深く入るると
火熱解さるると毒は肉の中へ深く入るると

疔

疔(針)を打つて血を引いて毒を引いて
うつると四聖膏を疔のうちへ入るると

瘰癧来熱つらうかじれうまで膿をのぞく
大悪症は変せんとするとも疔敷点とするす

此疔より膿水とて重と変て瘰癧す

○面部胸へ發する凶

發毒

地腫よあらず別腫起

○見点のともころ

でころひふてらる 輕

○でころひふてらる

瘰癧と名づく 凶

是ハ肌肉とら解さるると瘰癧かすらす
とこり又氣血毒は飯して瘰癧飯せると
かさねてとらえん并解毒す

○わんうまのどれ 凶

○元氣実

内攻せよ

骨のあつて毒とらするハ

先甲に生を得べ

治方補して毒とらして解毒とせぬ

○胸顔へ發する 凶

○痘疹ひく 凶

○膿のぬ 凶

發毒水哈

食道日咽在後
氣道日喉在前

水瘡 すゐそう むせぶ

飲ののれむせぶハ火毒のいどいどさうりてのみもの
さうけずささてまこのいどいどは食道と氣道と二ツ
ありのみんひの食道入り氣道ハ呼吸の通路
なり今食道は毒ふきざりてのみものいどいど
由るあふまて氣道へ入るそのいどいど氣道ハ内
よりのいどいど出す息あておしりどさうりむせぶ
さうり
食物の通るらわのみあておしりどさうりむせぶ

○初熱のいどいど

毒の氣道へいどいどさうり
さうりさすべし

さうりさすべし

○むせびかすぬ

毒深重

升麻葛根湯

善治者当視其毒
盛之痘於咽喉乾
燥之先而

用 甘吉湯

消毒飲上

加麥杏牛荆

之類以清氣道

如是則有毒化而

自能免患

見点之初

用清涼解毒

○七日以前

○痘 紅紫 あかむらさ

水瘡

火熱のわけて
毒のいどいどさうり

○痘

白 しろ 水瘡

氣血虚弱
肺胃がまがさうり

○六日以後

○痘 あか 水瘡

のいどいど痘も赤なる
かせの後のいどいど

○痘黒いへんする

重 おも 火熱肌とあさつひる

○腰 こし 凶

火熱さうりて腎水へる

○かえらむのさすべし

氣道は痘あてて膿さのもちさうりむせぶ
かせらむむせぶのいどいどさすべし

聲啞

いんいんいんいんいん

熱毒上へのりり痰を生じ痰氣道より
浮るる声啞するなり

初熱

痘ハ五臟よりづるもの由糸皮毛ひらぎれが
痘毒内よりその神の火のどく皮毛火
毒さうくる由糸そのつらさどつらさの肺の
臟とさすまふよりして肺の臟の持するの声が
つらさして啞のどくさうなり

いんいんいんいんいん

声啞

毒熱盛肺を刺す

重

麥門石膏之類

本うゑのど死 声啞

肺道は痘あり氣道とささぐり由糸声つら
さうなり

本うゑのど死

声ひくさう

氣虚ハ

常候と有る容体
肺氣を補ふ

温藥を服しまぎして声啞す

肺熱とさすまふべし

肉腫

痘の腫るにあらざる肉のたれらなり

肉腫と世上めて死症としくとも陽明胃
の腑は熱熱あつらなり麻黄葛根湯と
用ふべし

續下

肉腫倒靨黒胎

倒壓

膿とゆめらからうそ内へ引とむる
あつた氣虚して毒引とむる

膿

是倒壓よりらんす
温補内托すべ

根暈

根暈と見ち
血ちらる
氣血とひる薬及む

風寒外

風寒を温散す

黒陷

黒ハ火毒より陷ハ氣虚なり

根暈

血ちらる
血ちらる
不治

寒熱の辨 熱始痘赤すだるハ 黒して焦る
寒始痘つやう白ハ 黒してころ
風寒外はとろ 外邪を温ますべ

焦紫

血熱 熱と清し血と養べ
虚陽外は浮んで焦紫ハ 反温補すべ
根暈血ちらる 不治

皮薄漿清

膿ハ濃皮ハ厚と貴
こまの痘毒のまご皮膚へうつすもの
ざるゆゑなり

治 補ひて 漿のち 或ハ腫毒をとり 吉
内より 或ハたゞ口を合死 是伏毒をとりするなり

○内症 重者 凶なり 後をら下る

○氣虚膿をもち 毒と化すことあり 内より毒をとりす

○一撞たすとやふ紅きあり 是ハ脾胃を補ひ小便と通すべし

○八九日ありて 内攻あり 死

空倉 膿の全う死する

○本来氣血まじりたるが 痘毒化せざるなり 多死症

○内症のく食すめが 毒肌肉は滯りて皮の表へいせざるなり

元氣十分のみちなきなるゆゑ毒内へ入ることあり 温補して毒をとり又發散を兼ねば 愈へ内症重ハ死す

爛

○痘數粒一志にあり 湿氣皮層は 重

○たゞはせかせず 十三四日ありて 不死

○たゞはせて 痛堪べからず 熱うちたるとするゆゑ

用白朮茯苓白芷 防風之類 去濕滲水 補脾滲濕 汪氏解毒飲加苓

敷藥

滑石末
敗草散
珍珠末
象牙末
蕎麥末
之類

爛成膿水不乾

滑石末
敗草
珍珠末
象牙末
蕎麥末
敷之

○たぐまて

濃水かきぬ

かひ薬すべ

赤粉を
ちりちり

臭爛

毒皮層は滞る

○うそみくす

あやふ

○毒化せぬ

内症をくえ氣実すまがう

○爛

此ニ他症ありむとろ痘ふ所宜とす

吉の故ハ

臭爛外あり
痘毒内ありらるゆあり

臭

うまぶき死る

○臭と計一字稱する外臭あり

○口臭と口字を加へるハ胃中のこれとす

○痘のふかひ入とつくとやど臭ハ 胃中のよきと
たるあり

○初ハ うの移つとらるえすべ

○かせのと死ハ

○少くくまみハ

常候有べき症 吉

○全白ひ無きハ

餘毒あるとすいまさるせす

○痘重うして全白ひる死

餘毒あり

○口中とらるる臭き 口疳といふ症あり愚べ

まこ走馬牙疳といふは口中より齒落て死

膿水

うそみぐ

○痘のまごごとくくいでず

まごかたうして

膿水のてかきぬ

真氣のりくを
ふせぐべ

こま真氣をのらす

搽滑石末防洩真氣
或真綠豆粉亦可

護痘金囊

續下

膿水 毒疔 失血

十四

害 疤

まどでよかせて疤又害を

こまこま一いついふそみまざるごとくしやまじうしく
化せずして毒皮膚層のあつてよまどまどと
治法 補ひ養ひとくすと一解毒とくすと

失血

血と九竅よりいふ

最悪候

痘の功とすすかろらすき血とゆつてす
血はすうらち形の有ゆのあま一旦ゆきそ
不足すまが急は補ひたせぬゆのこまろ
に血すてよ不足するゆ急と氣のゆこれよ
べきとまろらゆゆと痘膿を成就する
とあつてまろらゆ

斑
紅明 紫 青藍
軽 重 死

獲豆帛囊

續下

斑

十五

血

血はどまろらゆ

凶

痘の色

痘の色かまろらす

紅くつやあろら

かまひま

鼻血

鼻血は 鼻血のゆ

吉兆

○ 餘の死より血出る

凶

○ 赤より出る

凶

斑

陽明に属す

痘の色と合せかまろら

升麻葛根湯
十神解毒湯
加大黃

旨不至齋藏

○ 赤痢

陽明の熱

ころきんす

○ 起脹

陽明の本熱

熱をさます
便秘はくす

○ 内大便秘せす
外貯滯す

熱陰を扇ぎ

血をけりて
斑をさす

○ 瘡赤紫

血熱

けりねのきまき

○ 唇真

胃中たぎころし

○ 本うそのと死

温補すべし

斑の二症ハ

虚火のさすころし
散散とせす熱毒を解さぬ
ぬけり来るころし

水泡

けりつがあまのつぶのこく散粒
水とやんせひぶるのこくはぶ
又おれなるま

氣あまのあり血い不足り生ず
おとと瘡疹毒さるんは火さるる死
火の上へあがるとあこす水い下へる
とあこす皮膚の間はあこ合てその
餘熱湧上つ水泡とる

○ 泡点あまころし

吉

○ 伊けのこ死

重清火毒

又脾胃虚弱して水と制するこあこ
さるる水皮膚の間は溢る水泡とる
○ 本わそのと死
氣血を温補す

四君子湯合參芪飲
加防風白芷

獲豆帛膏
續下

水泡效嗽

四聖膏

泡

○白 氣虚
○白而清水 氣実
○紅紫 血熱

○白泡 暑熱の毒 汗をかく 入る

欬嗽

せせ

○熱毒 痰を吐く 咳をする 咳をする

○痰 肺の臓の元 津液が少い

○痰 肺の臓の元 津液が少い

○せせりくせせりく

○せせりくせせりく 肺をさする 咳をする

○のんどの中に録ひききこのとく声ある

乳食湯水口は入をせせりく
右五々条とて表の氣をさく津液が少い
あーく痰生 正の氣をさく胸膈よき
かる皆毒氣肺胃に積るる

丹疹

あつきのせせりく

あつきの脾は属してかまて皮膚層の間は
有つあつきのひくまて赤く
むら雲のどーあつきの手足身脊の上は
あつきのとせせりかあつきのあつきの
あつきのあつきのあつきのあつきの

○痘丹疹と夾む

治さずして愈

上 雙豆帛膏 續下

丹疹眼

十七

眼め

痘密眼

眼

○開

五六日め

期す

此限よかあや心附へ

眼は痘の入り六七日の後にさるるべし眼の中は
痘出るところより一り痘果てのて見点のさ死
たぶひてひらうす蓋天てのりうその下めり
眼中は何ら子細あるものろり尤百人は一見
点より眼中たぶひが失明とさるべし

○眼中たぶひり或いはぶ死

眼よあの大凶

- 毒壅ハ 丸下劑
- 氣虚ハ ちきうのべ
- 血虚ハ ちきうのべ

但

眼病

胃熱解さるるもの

脾胃の熱毒とくく解さるるものを生ず熱
毒積ると血々深うして眼晴のろちろりを
生ずるものろちろりかささるるものろちろり
まろりて痘とよぶくらふ

○かすむ

○ろちろりの生ずる

○ろちろりを生ず

○ろちろりので

○赤すぢのて

痘眼よ入へ

眼の候

○たれまらち

○頭頂大の痛

○餘毒眼よ入へ

○ろちろりは赤く痛む

○餘毒眼よ入へ

大連翹飲
大黃
羚羊角散

鬼糞丸

涼肝明目散

羚羊角飲
之類

防風通聖散

大連翹散

去通車滑加

升葛薄

護豆帛
續下

虫痘口疳

蛆瘡

又とせうとせうのうらにけい

○青蠅臭氣をたきみ

膿のしをとりてすの卵をとりつけ
長くとせ蛆とせうとせうとせう

○蛆とせうの法

内ハ 清涼解毒のすを服ひ
外ハ 絲瓜葉の汁をとり

但 あと葉をたきみ
蛆のつら出

○又とせうとせうの法

銀の針をせりてすの卵をとり
すの卵をとりてすの卵をとり

口疳

又走馬牙疳

胃熱のこす

○口のまわり白きかす

大凶

かみのまんな中をぬき

○口のまわり白きかす

軽

唇舌腫て石のよう
歯ふき黒くたまる

重

○かすのいろ黒く焦いでん
みゆひ鼻とせう

死

鼻をたき

涼血攻毒飲
涼膈散
甘露飲
王鑰匙
金不换
之類

禁忌のしるし

- あまきと氣とさくべ〜
- 腋下狐氣 ○大便小便の匂ひ ○婦人經行の氣
- 諸瘡の臭氣 ○蚊母りの氣 ○髪に毛焦る匂
- 魚と焼匂 ○淫玉の匂 ○酪酢葷氣
- 麝香の匂 ○すく匂とさくべ〜
- さくまの匂
- まじく來往する ○まじりのまじり ○しつりまじり
- 病の前まじり ○病の前まじり ○病を驚へらす
- 病人とまじり ○病人とまじり ○高きまじり
- 風寒まじり

○衣類ハ

- 五日以前の常の通をより見直し一日の五日迄
- 五日以後はごんくあまらふすべ〜
- 外來穢不淨と避方
- ゆるく穢不淨とよける
- 産婦房中經水の穢
- あらいふまの匂ひハ
- こまごまハ
- うまひの匂ひハ
- 雨或ハ濕氣ハ
- 喪者のけがれ
- 疫癘傷寒のるハ
- 糞土のあやひハ
- 赤豆と〜
- 大棗と〜
- 生姜と〜
- 楓球と〜
- 葛花茵陳と〜
- 蒼朮楓球と〜
- 蒼朮と〜
- 赤小豆と〜
- 赤小豆と〜

續下

禁忌

○食物禁忌

○糯米 かせらるゝに 実熱の症痘よりゆれ初忌

○酒 九日十日のほち 百日のむ 実熱の症かまふまで

○白酒 十日のほち 百日のむ 実熱の症かまふまで

○醴 始終く 多くめらるゝが 多死のつ

○酸 百日のむ

○胡麻 赤悉く落る迄忌 症より痘中用るべきあり

○あじ 豌豆 五日より十二日迄與ふべからず

○芋 眼病餘毒つきの三七日の後より

○筒蒿 多んきく 六日より十日迄與ふべからず

○鶏兒菜 血とやどり氣とくす初より十二日迄忌

○蕪菜 十五日のほちより

○うめがし 同

○白抜 百日のむ

○こんぶ 十二日のほちより

○蚕豆 眉兒豆

○大豆 五加苗

○葡萄 慈蔘

○石草 麩

○うめぎ 十五日の後ちひき死より

續下

禁忌

二十一

○ふらふら あ

○泥鰌どろぢう 十五日ののち後

○鯿ちり魚い 十五日ののち後

○たら 十五日ののち後

○魁蛤あつがひ 十二日ののち後

○蚊蛤あぶら 十五日ののち後

○つりと又まんと

○かき 〇 洲魚せ

○ゆめむら 〇 かつらら

○もうと 〇 あまび

始終しじうのい物ぶつ

至てから三日か廿日後廿日、その酔酌のふた六醫者、同べ

○あぶららのい物ぶつ 〇 志かのい物ぶつ 〇 醋すのい物ぶつ

○焼酒やうしゆ 〇 酒さけのい物ぶつ 〇 氷菓こ子このい物ぶつ

○きしり 〇 ちまのい物ぶつ 〇 たらのい物ぶつ

○こえのい物ぶつ 〇 せんまのい物ぶつ 〇 こらのい物ぶつ

○からのい物ぶつ 〇 ちまのい物ぶつ 〇 こらのい物ぶつ

○ひののい物ぶつ 〇 あまのい物ぶつ 〇 たらのい物ぶつ

○みよのい物ぶつ 〇 のい物ぶつ 〇 たらのい物ぶつ

○胡椒こせう 〇 せり 〇 鮭さけのい物ぶつ

○香魚かぎ 〇 鱒ます 〇 鯪うまのい物ぶつ

○鱒うまのい物ぶつ 〇 鱒うまのい物ぶつ 〇 鱒うまのい物ぶつ

- 撥尾ひら
- 文鯨魚ぶら
- 青魚あじ
- 拔魚ひら
- 鯨魚あじ
- 馬鮫うなぎ
- 鰯いわし
- 海鱈たら
- 鯖さば
- 鯖さば
- 烏賊魚いか
- 鰻うなぎ
- 鱈魚たら
- 鮭魚さけ
- 鮭魚さけ
- 竹筴魚たけのこ
- 牛尾魚うしお
- 白刀魚しろさ
- 住蕪魚すわ
- 繁魚あら
- 田贏たに
- 西施古せいこ
- 拳螺せんら
- 玉珧たまご
- 蛤蜊かき
- 鴈かり
- 家鴨あひる
- 雉きどり
- 青鵝あざな

護痘錦囊藥方

編内所載藥方其下主治既具不再贅其所不載者今具于茲

初熱

升麻葛根湯 又曰升麻湯

升麻 葛根 芍藥 甘草

加減益氣湯

黃芪 人參 甘草 當歸 川芎 白朮 陳皮 升麻 桔梗 姜煎

荊防敗毒散

獨活 羌活 柴胡 前胡 枳殼 桔梗 川芎 荊芥 茯苓 防風 連翹 甘草 金花銀薄荷

清解散

防風 荊芥 蟬退 桔梗 川芎 前胡 葛根 升麻 連翹 黃連 黃芩 紫蘇 木通 牛房子 山草 甘草 姜煎

温中益氣湯

人參 白朮 黃芪 當歸 茯苓 甘草 川芎 白芷 防風 木香 桂枝 山查 姜煎

疏肝透毒散

強蚕 蟬退 薄荷 釣藤 青皮 木通
前胡 山查 羌活 荆芥 燈心草 姜煎

導赤散

木通 地黄 燈心 引煎服加辰砂末送下可或加蟬退牛房子
防風 薄荷

涼膈散

連翹 山梔子 大黃 薄荷 水浸八片葉七片蜜少
黃芩 芒硝 甘草 許煎七分食後温服

甘桔湯

甘草 一方聖參 荆芥 牛房子 麥門 山查根
桔梗

涼血攻毒飲

大黃 荆芥 木通 牛房子 牡丹皮 紫根
芍藥 葛根 蟬退 青皮 紅花 地黄
燈心一分煎服如朱益甚者黃為君加桃仁每劑契桑蟲汁日服三次劑

清涼攻毒飲

石膏 黃連 大黃 木通 紅花 荆芥 燈心水煎
牛房 犀角 丹皮 青皮 地黄 紫花地

當歸補血湯

黃芪 當飯

加味升麻葛根湯

葛根 升麻 芍藥 甘草 桔梗 姜煎熱服取汗
防風 蘇葉 川芎 山查 牛房

加味參蘇飲

人參 蘇葉 川芎 桔梗 前胡 陳皮
甘草 茯苓 半夏 牛房 山查 葛根

麻黃解表湯

麻黃 升麻 羌活 葛根 防風 水煎入燒人糞同服
荆芥 蟬退 牛房 桔梗 甘草

射干鼠粘子湯

牛房 甘草 射干

參麥清補湯

人參 麥門 葛根 黃芪 前胡 牛房 甘草
炙甘 芍藥 酒炒芍藥 當飯 紅花 川芎
地黄 桔梗 山查 生姜片 龍眼肉 三個同煎

見点

續下

藥方

二十四

和鮮湯

升麻 芍藥 葛根 人參 姜煎
川芎 防風 羌活 甘草

加減升麻湯

升麻 葛根 芍藥 甘草 前胡 姜蔥水煎
紫蘇 當歸 連翹 桔梗

十神解毒湯

當歸 川芎 地黃 紅花 丹皮 燈心水煎
連翹 芍藥 桔梗 木通 大腹皮

清毒活血湯

紫草 當歸 前胡 牛房 木通 連翹 地黃
芍藥 桔梗 黃芩 黃連 甘草 山查 人參
黃芪 姜煎煩渴者去參芪加麥門天花粉

固陽散火湯

人參 黃芪 當歸 升麻 葛根 連翹
防風 地黃 木通 荊芥 甘草

人參飯芪湯

黃芪 人參 甘草 當歸 川芎
桂枝 山查 紅花 白木 姜煎氣滯者少加木香

十全大補湯

當歸 川芎 芍藥 地黃 人參 姜棗水煎
白木 茯苓 甘草 黃芪 肉桂

大保元湯

黃芪 人參 甘草 姜棗水煎氣滯者加木香山查
去桂不食者加人乳羊鍾
桂枝 白木 川芎

木香散

桂枝 青皮 木香 人參 腹皮 茯苓 姜煎
前胡 半夏 丁子 甘草 訶子

異功散

木香 肉桂 當歸 人參 白木 陳皮 姜棗煎
厚朴 丁子 茯苓 肉蓯 熟附子 半夏

神效散

又見味神散
黃芪 人參 芍藥 紫草 地黃 紅花
前胡 牛房 甘草 熱甚者去參芪加芩連
有驚搐者加蟬退

四聖膏

珍珠^五 豌豆^燒 髮^{灰各}
雄黃^八 紫草^半 冰片^分
細末油脂調刷破疔頭點之

清熱解毒湯

荊芥 紅花 蟬退 木通 牛房 丹皮 青皮
地黃 山查 滑石 前胡 黃連 紫花地 知心

四物湯

當歸 芍藥 地黃 川芎

起脹

保元湯

人參 黃芪 甘草 姜煎

千金內托散

人參 當歸 黃芪 芍藥 川芎 桂枝
炙甘 山查 木香 甘草 白芷 厚朴
姜片龍眼肉三箇入好酒和服又參芪內托散此方中去山查
生薑龍眼加桔梗

奪命五毒丹

蟾蜍^少 牛黃^二 硃砂^分
雄黃^分 冰片^分
用猪尾兜薄荷湯下
火毒攻衝心者有神功

辰砂益元散

滑石 甘草 辰砂 末服

桂枝葛根湯

葛根 桂枝 芍藥
升麻 防風 甘草
加生薑淡豆豉煎服寒月加麻黃

錢氏白朮散

人參 白朮 茯苓 木香
霍香 葛根 甘草

潔古白花蛇散

白花蛇^{二兩炙} 細末以酒熱服 熱毒者忌之
丁子^{三十粒}

內托散

千金內托散參芪內托散之類詳千金內托散

灌膿

安神丸

當歸 黃連 茯苓 麥門
甘草各高辰砂兩龍腦二分半
梨湯浸蒸餅積猪心搗勻如黍米大每服十九燈湯下

回陽返本湯

人參 黃芪 鹿茸 當飯 川芎 水煎
肉桂 甘草 山查 熟附子 大棗

建中湯

又云聶氏建中湯
人參 黃芪 白朮 當飯 川芎 姜煎
附子 乾姜 肉桂 炙甘 丁子

七味豆蔻丸

木香 縮砂 金菱 赤石脂 白礬各七錢
訶子 龍骨 肉豆蔻各五錢半糊丸

一粒金丹

脛胸臍二雅片三冰片二
麝香一 原蚕蛾二糊丸 金箔為衣

參茸鹿茸湯

鹿茸 黃芪 當飯
人參 炙甘
右美龍眼肉同煎去滓入好酒盃溫服

白龍膏

用乾牛糞久在風露中者火煨成灰取中心白者
為末薄絹囊裹於瘡上撲之

四君子湯

人參 白朮
茯苓 甘草

忍冬解毒湯

金銀花 貝母 菊花 荊芥 牛房
紅花 甘草 木通 連翹 紫花地丁
加胡挑煎服

大連翹飲

連翹 牛房 柴胡 芍藥 防風 木通 當飯
車前 荊芥 黃芩 山拖 滑石 甘草 蟬退

保嬰百補湯

當飯 地黃 白朮 人參 煎
茯苓 山藥 甘草 芍藥

除濕湯

羌活 蒼朮 防風 芍藥 猪苓
澤瀉 白朮 甘草 挂枝

收醫

汪氏解毒飲

當飯 芍藥 人參 山查 黃芪
荊芥 牛房 防風 炙甘

利咽解毒湯

山查 麥冬 玄參 桔梗
牛房 防風 甘草 姜煎

四順清涼

當飯 芍藥
大黃 甘草

生肌散

黃連 黃柏 五倍子
地骨皮 甘草 細末搽之

補中益氣湯

人參 黃芪 當飯 柴胡
升麻 白朮 甘草 陳皮 湯加麥冬五味水煎

調元解毒湯

當飯 川芎 芍藥 白朮 茯苓
甘草 桔梗 連翹 木通 山藥 姜煎

甘露飲

麥門 天門 天花粉 茵陳 生地 熟地
枳殼 枇杷葉 石斛 黃芩 甘草

金不換

走馬疔吹藥
人中白 枯礬^{各三錢} 鹽梅^{七個} 煨存性
五倍子 白礬^燒 胡黃連^{各一錢} 和吹之 和胭脂水塗之 亦可

靈棗丹

走馬疔疔一切疔
小青蝦蟆^{不拘多少} 生礬^{各五錢}
黑棗^{十枚} 去核 共搗爛 鹽泥封固 煨存性 為細末 敷之

涼肝明目散

又云涼肝散
當飯 川芎 柴胡 龍膽
黃連 防風 蜜蒙花

風捲雲

夜明砂 蟬退
蜜蒙花 谷精草^{各五錢}
共末 每用一錢 用豬肝二兩 披開 擦之
藥在內 約定水 煮連湯 用之

釣藤湯

陳皮 釣藤 牛膽 南星
天麻 姜蚕 人參 燈心水煎 臨時加牛黃真珠
遠志 犀角 石菖根

必勝散

大黃 荊芥 芍藥 青皮 地黃
山查 木通 防風 桃仁 紫花地丁 水煎
蟬退 葛根 地龍 紅花 芦根

八物湯

當歸 川芎 芍藥 地黃
人參 白朮 茯苓 甘草

瀉肝散

羌活 當歸 山梔 龍膽
川芎 防風 大黃
一方有木通柴胡黃芩
無大黃

柴胡四物湯

柴胡 人參 黃芩 當歸 川芎
地黃 芍藥 地骨皮 麥門 淡竹葉 水煎

涼血四物湯

當歸 芍藥 地黃 黃芩 紅花
黃連 連翹 牛房 甘草

調元內托散

起發泡癩之時月事大來瘡不起發不灌平塌或白或黑陷者
黃芪 人參 當歸 桂枝 木香
青皮 芍藥 牛房 川芎

當歸養心湯

瘡中經水忽行暴瘡不語者
人參 當歸 升麻 燈采煎
地黃 甘草 麥門

安胎如聖散

孕婦出痘最要安胎
黃芩 白朮 當歸 連翹 砂仁 枳殼
甘草 大腹 陳皮 桑樹上羊兒藤 水煎

安胎飲

初熱既退諸症平準者
人參 白朮 黃芩 地黃 川芎 當歸
芍藥 砂仁 紫蘇 陳皮 甘草 姜棗水煎

安胎飲

瘡出定後無餘證者
人參 陳皮 大腹 茯苓 砂仁
芍藥 紫蘇 香附子 甘草 糯米煎服
如有汗去蘇加黃芪胎漏者加阿膠百草霜艾紅花

聶氏建中湯 建中湯同

娠娠
出痘

婦人
出痘

九味神功散

神功散同

發熱疑似之間

惺々散

人參 白朮 茯苓 天麻粉 桔梗 細辛 薄荷 甘草

加減排膿湯

當飯 川芎 芍藥 人參 陳皮 甘草 白芷 山查 木通 桔梗

餘毒上攻眼目生翳羞明眩淚俱多紅赤腫痛者

羚羊角散

羚羊角 黃芩 黃芪 草決明 車前 升麻 芒硝 大黃 防風

玉鎖匙

咽喉腫痛飲食不入者
朋砂 葵 扑硝 五分 姜蚕 一條 片腦 五厘 細末以竹管吹之

竇之氣散

血至而氣不至邪熱不長或平或陷不充肥者
丹皮 前胡 木通 芍藥 強蚕 蟬退 穿山甲 防風 枳殼 川芎 麥門 服如葉蟲汁

敗毒和中散

初熱之時腰痛腰痛煩悶者
連翹 牛房 黃連 枳殼 紫草 蟬退 前胡 木通 升麻 甘草 麥門

兜糞丸

瘦入眼或生翳障者
石決明 煨 草決明 木賊 木賊 白芍 兜屎 防風 各二錢 當飯 五錢 穀精草 二錢 右蜜丸如菜豆大二五十九丸荊芥湯送下

涼肝明目散

痘後羞明者
當飯 龍膽 川芎 蜜蒙花 防風 柴胡 黃連 各等分雄猪肝者湯煎服一方加蟬退

仲景當飯四逆湯

當飯 桂枝 芍藥 木通 細辛 大棗 甘草

防風通聖散

防風 荊芥 連翹 麻黃 薄荷 滑石 白朮 山梔 大黃 芒硝 石膏 黃芩 桔梗 甘草 川芎 芍藥 當飯

參砂和胃散

人參 編砂 半夏 白朮 茯苓 藿香 陳皮 甘草 干姜

獨參湯

人參 姜棗水煎 虛痘四日後諸症不穩者

參附湯

人參一两 熟附二錢 姜棗水煎 五日後純陰無陽者

護痘錦囊續編下終

附錄

疱瘡神の事

按おむるふ疱瘡神かみの説せつ和漢わかんともとも詳まらさらずらるらと
 ありハ樂官譜がくみやうが耳食録みみくろくは我眉山わがびざんは姐妹三人あま麻あの
 衣きものとまきたる女仙おんなせんありて疱瘡かみと主なたり人呼ひとよで麻娘あまの娘と
 いふ神しん至いたて清淨せいじやう潔白けつぱくと好このむ穢け不淨ふじやうと嫌きらふ又錢希言せんきげんか
 狩園かすのの吳ごの國くに疱瘡かみとうとある人ひとのまが五郎神ごろうかみと
 堂かどうは祭まつりり牲ひけと具そなふ是これを花花五聖かかごごせいと稱なふと云いふ
 すれば吉兆きしやうなりといふ又惡痘あくたうは別べつは痘司鬼たうしきといふ惡鬼あくき

獲豆帛裏 續

麻娘娘

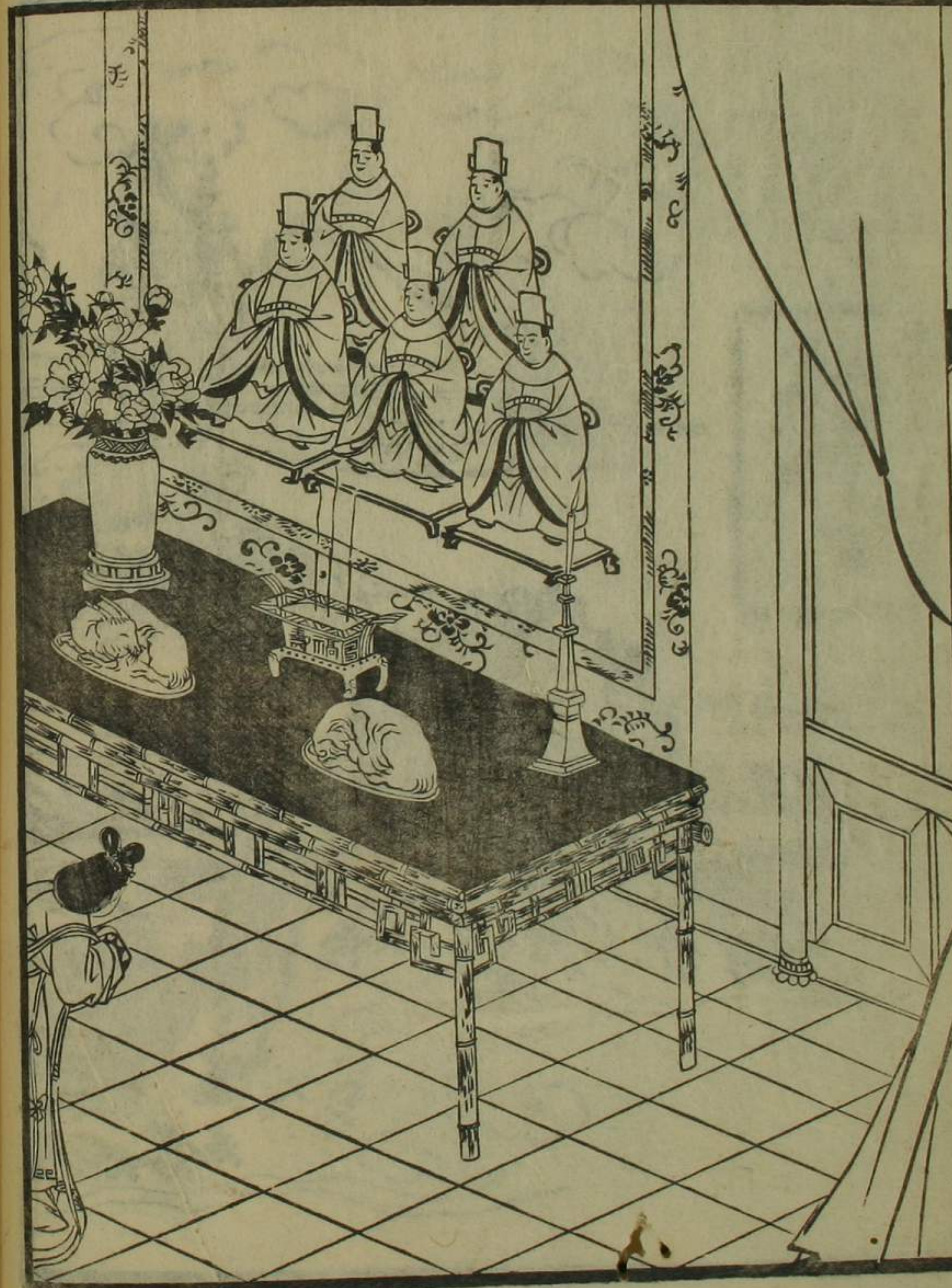
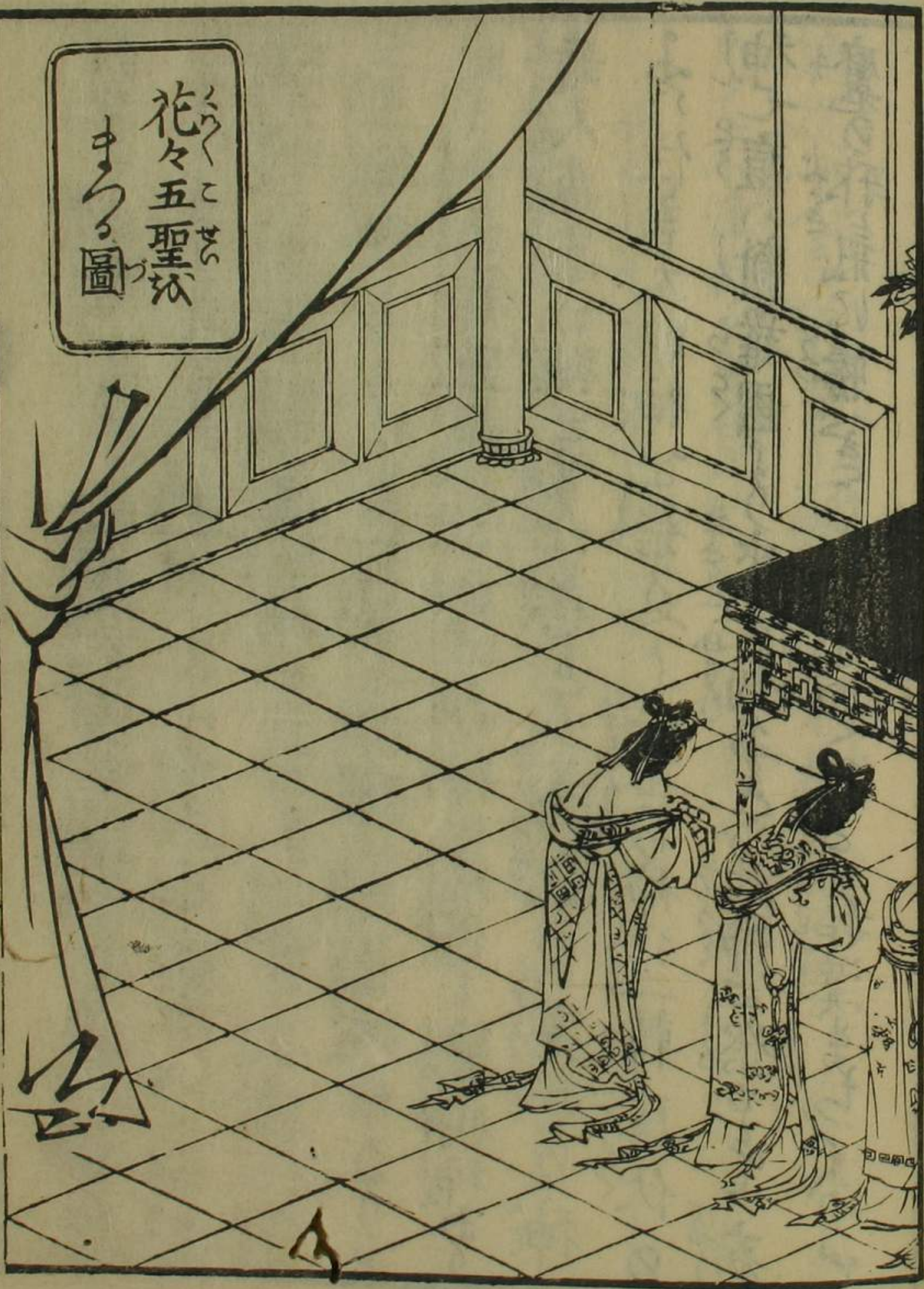
三十二



我眉山
麻娘の圖



旨不至齋藏



あつて小兒と云ふまゝ或の説は難痘ゆて果て冤鬼
 のりまうと云ふもの本邦ゆてハ痘疹守護の神の出雲
 國大社の末社ハ鷲森明神といふありて一説ハ文徳仁壽
 三年神命よりてこれと祭る神體ハ天月神命よりと
 今東都雜司ヶ谷鬼子母神の境内ハ鷲明神の
 諸人疱瘡の神と尊び祭り又一説ハ疱瘡の神
 住吉大明神と祭る住吉の神ハ三韓降伏の
 神ハ痘ハ新羅國より來る病と云ふ此神と祭つて病
 魔の邪氣に勝んたりとかのてとて和漢と云ふか

適從すべき説ハ一體痘ハ表發と專らとするが故ハ
 凡て不淨ありき白ひのもの發達と云ふと云ふは
 不淨と避んてその初志の繩と云ふと云ふは
 又痘の重きハ神のからと云ふとて見ゆるもあま夫より又
 一轉して神祭りするところと云ふとて見ゆるもあま夫より又
 主る神定らるる是らの夏醫家の拍るべきはあり
 且ハ強て辨せず痘痘の家ちのく心々よまうすべ
 酒湯の調度 さめかけやうの上の六葉目よあり
 衣類ハいづともありの無紋なり或ハ男女醫者とも麻

疱瘡神
鷲大明神の像



上下十徳かしのりさげ帯等の上へ紅麻の單のりハ
 襲くと同ト男帯とするところりその調度ハ質の鹽
 一ツ ごあんぬくつる 同手桶二 馬同 一ツハ湯 すだ
うめ松竹と画が 扱五合柄扱二本同
 八寸水こゝ三方一さん俵一箬三本 水引きて本と 赤小豆
ごやく紙 鼠の糞十二 ニツつぎたる但 さして右の鹽へ湯と
つむ 酒と和せしる 湯一手桶 と次の間より持いで又三方
い 一さん俵とのせ其上 そのへん 右の二種と紙一疊のせ
あぐさ めちいで赤豆鼠糞と鹽の内へ納酒湯とかく省
あぐ 略ハ各心まうせよすべし

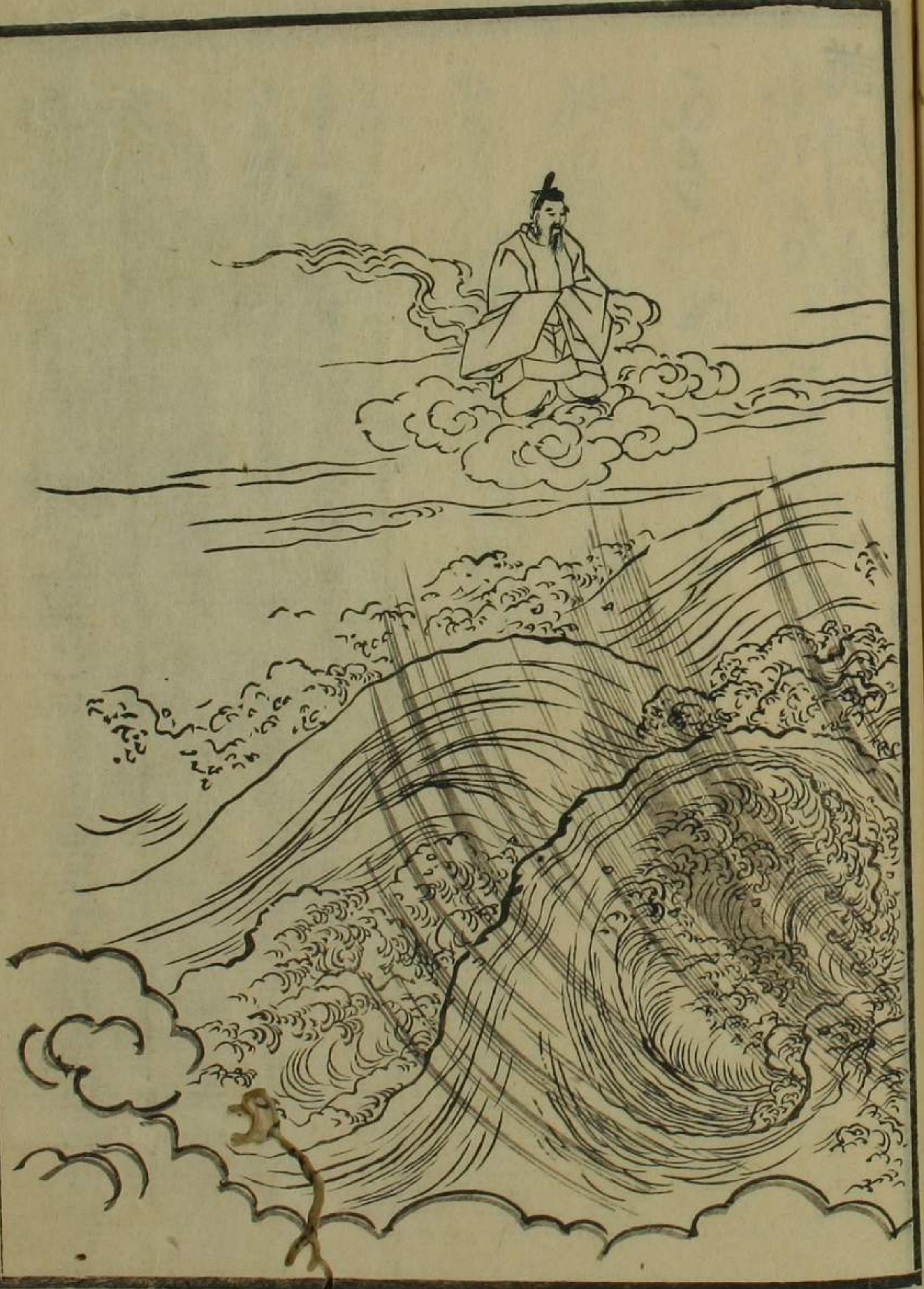
續工
 住吉大明神
 三十五

言天金囊

住吉大明神
國土鎮護の圖



旨不至齋藏



住吉大明神
續下

住吉大明神

三十六

一通編脈を言ざる脈を用ひざるはあらず醫者との入ども
 浮沈遲數緩緊弦大等の如きの辨とひとども委曲を得がこ
 くり脈法と巨細は辨せざる自佳ことあべけとと堯筆のそ
 つらすべき所はあらず且痘の容射あまらずあらず
 めく脈の素人のゆらぬ更なることと略す

護痘錦囊大尾

小川氏乃ふのれと汲る。石塚の角き結
 うまいつめあつら。そらさのきう一城んるに
 此痘結ぶるあよりのた。然。半結河
 まへ。動もこおんもゆく末も。ま
 なくさつら。あて。こり。伎。の。今
 こあま。あま。のり。る。あ。あ
 文や。り。是。あ。あ。は。ね。ね。あ。あ。
 その。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

續

田了允先生跋

けうきまじま。うはれをむる。いあふ
 らしきしやまむ。一曰忠実ゆ。けい
 刺つて。それけいあにきりけい
 やう板あき。四す乃。あうら
 るよ。あうら。あうら。あうら
 のふつ。あうら。あうら。あうら
 あうら。あうら。あうら。あうら
 嬉う。あうら。あうら。あうら

ゆきと。波ゆ。あうら。あうら。あうら
 のれい。あうら。あうら。あうら
 たい。あうら。あうら。あうら
 る。あうら。あうら。あうら
 あうら。あうら。あうら。あうら
 うち。あうら。あうら。あうら
 らう。あうら。あうら。あうら
 おは。あうら。あうら。あうら

文政甲申杣冬刻成



石汶上先生著目

傷寒辨證

傷寒辨方

護痘錦囊

痘矩

疹規

經穴便書

京都寺町通松原下

勝村治右衛門

大塚齋橋安堂寺町

秋田屋太右衛門

江戸日本橋通四丁目

須原屋佐助

同 通一丁目

須原屋茂兵衛

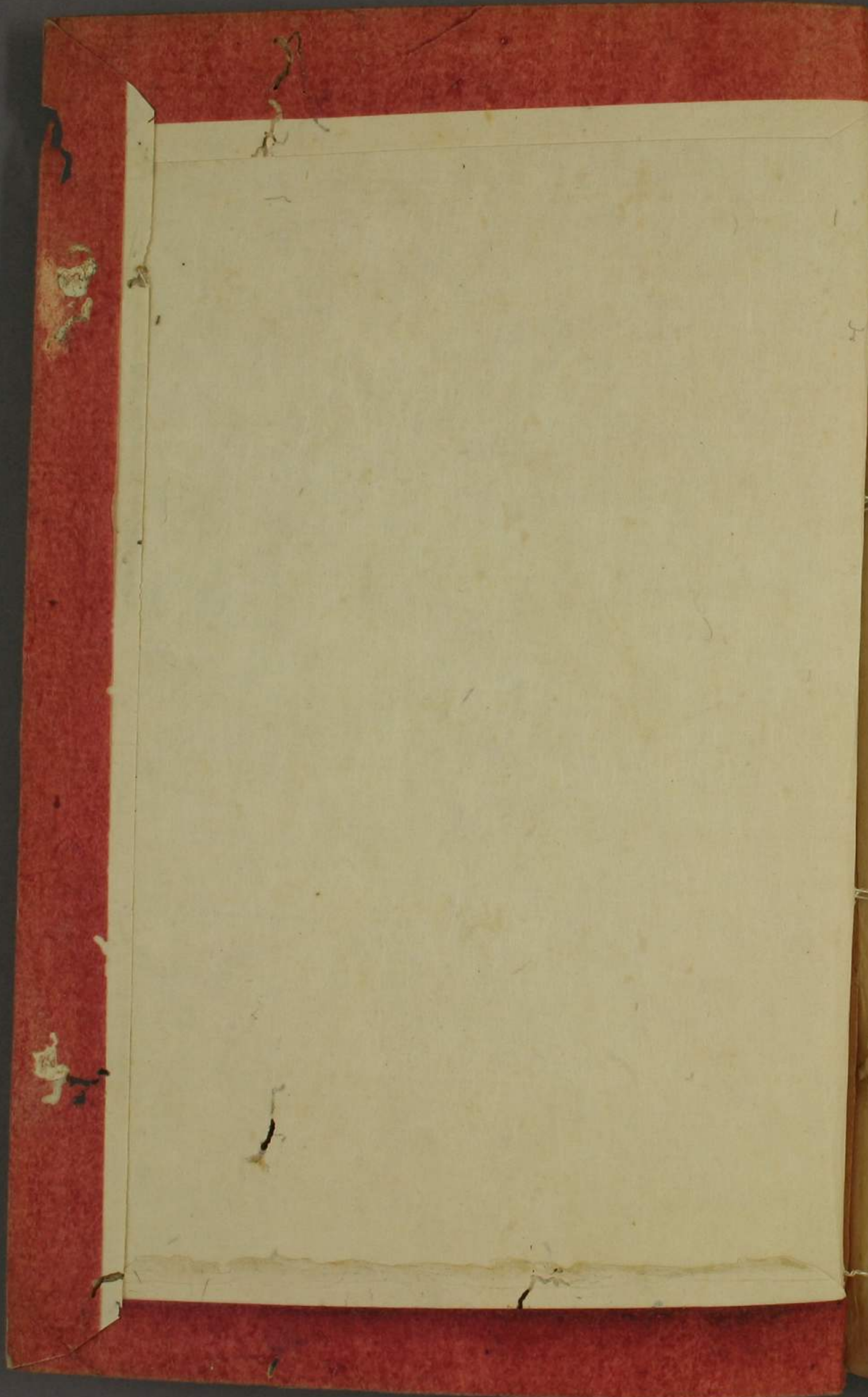


Table of Contents (Table of Contents)

卷一	目錄	一
卷二	論	二
卷三	論	三
卷四	論	四
卷五	論	五
卷六	論	六
卷七	論	七
卷八	論	八
卷九	論	九
卷十	論	十

